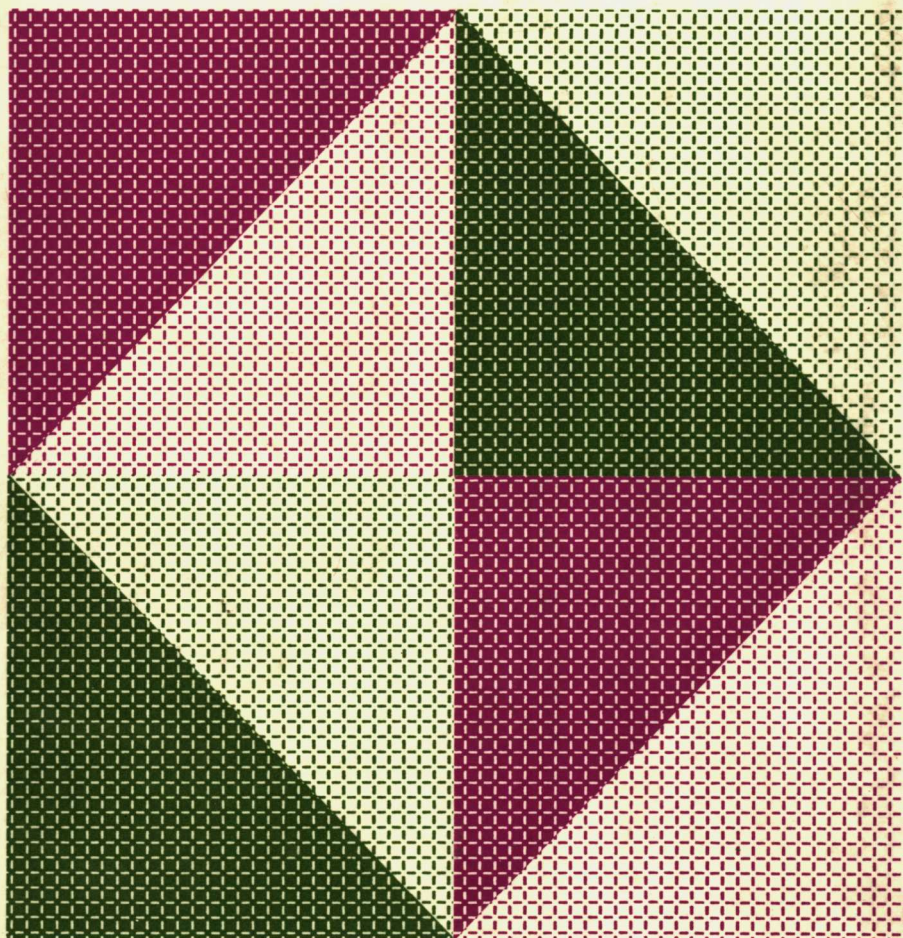


日本人の宗教意識

NHK放送世論調査所編



日本人の宗教意識

NHK放送世論調査所編

日本放送出版協会

まえがき

放送世論調査所では、昭和四八年から五年ごとに、日本人のものの考えかたや感じかたの変化を明らかにするため、同じ質問を使って世論調査を行ってきました。その中で目立った変化のひとつは、人びとがこの一〇年、次第に宗教に近づきつつあるということでした。人は年をとるにつれて、宗教を身近なものに感じるようになります。しかし、ここで言う変化とはそのような変化ではなく、たとえば、ハイティーンという同じ年齢層の人の宗教感覚や行動を、一〇年前、五年前と比較してみても、最近のほうが宗教に近いという変化なのです。そして、この変化は、戦後二〇年あまり続いた脱宗教的な傾向が逆転して起きた現象でした。

私たちが、人びとの宗教感覚や宗教的行動、信仰などについて世論調査を企画したのは、こうした現象のもつ意味を明らかにしたいと思ったからです。

「宗教回帰」と言われるような、この逆転現象が始まった昭和五〇年前後という時期は、戦後日本の社会の曲り角で、オイルショックをきっかけとする経済的な大変動のすぐ後にあたります。一年一年、生活が向上してゆくという、高度成長時代以来の人びとのバラ色の夢は破れ、逆に生活が悪化してゆく危険、失業や所得の減少などの心配が、思いがけず

目の前に迫ってきました。そして、人びとは不安や不満をつのらせながらも、急速に生活防衛の姿勢を固めていったのです。それは、これ以上生活が悪くなつて欲しくない、このままの状態でもいいから、何とか今の生活を維持してゆきたい、という気持からだつたと考えられます。

いわゆる「保守回帰」の現象が始まったのはこの時期です。NHKが国政選挙の度に行つてきた世論調査でも、自民党の支持率は昭和五〇年頃には四〇％ぐらいに落ちこんでいましたが、その後上昇を続け、最近では五〇％近くにまで達しています。それは、自民党を中心とした政権が続くことによつて、今のままの生活が大きく変わらないようにしようとする国民の気持を反映したものと考えられます。

「宗教回帰」は、こうした「保守回帰」と時期を同じくして起きた現象ですが、「宗教回帰」を「保守回帰」現象の一部と考えることには問題がありそうです。オイルショックをきっかけとする経済的大変動が、政治の領域では「保守回帰」、文化の領域の一部では「宗教回帰」という現象として表れたと考えるほうが良いと思われまゝす。

高度成長時代の「物の豊かさ」重視から「心の豊かさ」重視への人びとの生活態度の変化、同じく高度成長の鬼子ともいふべき公害問題に触発された科学的合理主義に対する不信などが、「宗教回帰」の背景にあると考えられるからです。

ところで、人びとの心が再び宗教に近づいていこうとする時、そのよりどころとなるのは、やはり日本の伝統的な宗教とその文化でした。このことは、伝統文化というものの根強さを改めて教えてくれます。伝統とは、このように、ある時期には稀薄になつても、またある時には力強く復活するものなのかも知れません。

本書で明らかにする、こうした「宗教回帰」現象が、この先どうなっていくのか、私た

ちは今後も注目してゆきたいと思っております。

終りになりましたが、この世論調査に御協力いただいた多くの方がたに、心からお礼を申し上げます。

昭和五九年五月

NH K放送世論調査所

所長 青野 雅哉

目次

まえがき

第I部 日本人の宗教

一、日本人は「無宗教」か……………3

(一) “信仰なき民族” 3

(二) 生活の中の宗教行動 5

(三) 独特の宗教心 8

二、共通する宗教的感覚……………10

(一) 祖先との心のつながり 10

(二) 「人間は弱い存在」 13

(三) 運命論的な考え方 14

(四) 「因果応報」という確信 15

(五) 現世利益についての期待 17

三、「民俗宗教」.....	19
---------------	----

(一) 宗教心と信仰との落差	19
----------------	----

(二) 日本的な宗教の形	21
--------------	----

(三) 「民俗宗教」という考え方	23
------------------	----

四、神々の平和的共存——日本の宗教的風土.....	24
---------------------------	----

(一) “多重信仰”	24
------------	----

(二) 宗教的寛容性	25
------------	----

(三) 一木一草に神が宿る	27
---------------	----

(四) 「みんなに合わせる」	28
----------------	----

五、習俗とのむすびつき.....	33
------------------	----

(一) 年中行事	33
----------	----

(二) 習俗によってはぐくまれる宗教心	34
---------------------	----

第II部 年齢・男女・都市規模による違い

一、宗教についての個人差.....	38
-------------------	----

二、年齢から見た日本人の宗教.....	41
---------------------	----

第Ⅲ部 時代と宗教

一、日本人の“宗教回帰”……………	74
(一) 死ななかつた宗教……………	74
(二) 戦後の二つの時期……………	75
五、日本的な宗教の根幹をなすもの……………	71
(一) 町村や小都市ほど“宗教的”……………	64
(二) 宗教心の育つ環境……………	68
四、大都市と町村による違い……………	64
(一) “女らしさ”と宗教心との関係……………	61
(二) 女性に強い、“現世利益”を求める傾向……………	59
(三) 宗教的な心情も行動も、女性に多い……………	55
三、男女による違い……………	55
(一) 老人ほど強い宗教心……………	41
(二) 若者に多い宗教意識と宗教行動……………	45
(三) ライフ・ステージと宗教……………	50

二、社会規範と宗教	78
(一) 揺らぐ社会規範	78
(二) 始まっている戦後規範の見直し	79
(三) 新しい規範の体系を求めて	85
三、科学と宗教	90
(一) 青函トンネルと「山の神」	90
(二) 科学が優位にあった時代	91
(三) “万能”ではなくなった科学	93
四、現代に生き続ける宗教	95
四、経済大国化と“宗教回帰”	100
(一) 生活についての満足と“宗教回帰”	101
(二) 民族的な自信の回復	109
(三) 目標の喪失	112
五、一つの時代の終わり	116
(一) 揺らぐ「戦後の常識」	116
(二) 「日本人の忘れていたもの」	117

第I部

日本人の宗教

「大橋 ……日本ほど宗教的に行動を制約されない国は珍しいと思います。結婚にせよ、教育にせよ、政治にせよ、いろいろな文化を受け入れた結果でさあがるのは、それらの要素の混合物ではなくて、一段高い次元で異なるものかも知れません。ですから、たとえば非寛容の宗教が日本で成功する可能性は非常に少ないと思います。」

レヴィ・ストロース　そうかも知れませんが、だからと言って日本人が非宗教的だということではありませんね。超自然的なもの、超越的なものに対する畏敬の念は非常に強いでしょう。」

大橋保夫

クロード・レヴィ・ストロース

「『民族学者の見た日本』」

一、日本人は「無宗教」か

(一) “信仰なき民族”

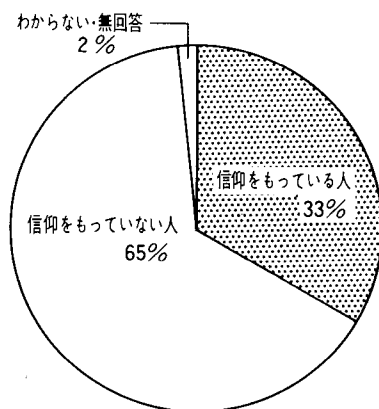
日本人は宗教的か、と言われたら、多くの人びとは、「日本人は無神論者だ」とか、「日本人は、宗教に対して無関心である」というような言葉を思い浮かべるであろう。特に、外国人とつきあう場合、この「宗教」というのは、難問の一つである。アメリカやヨーロッパに行く時、「向うで『あなたの宗教は何か』とたずねられたら、たとえ信仰していなくても、『仏教です』とか、『神道です』と答えておいたほうがいい。正直に『私は信仰をもっていない』などと言ってしまうと、変な目で見られる」などという助言をされた人も、少なからずいるにちがいない。一般にこのような注意が必要だ、と考えられるほど、日本人は無宗教だ、ということになっているようである。

じつさい、日本人には、信仰をもっている人が少ない。わたしたちの調査によれば、なんらかの宗教を信仰して

いる、という人は三三%で、日本人全体のちょうど三分の一に過ぎず、残りの三分の二は信仰をもっていない。日本人の大多数は、信仰をもたない人なのである(図I-1)。

図 I - 1

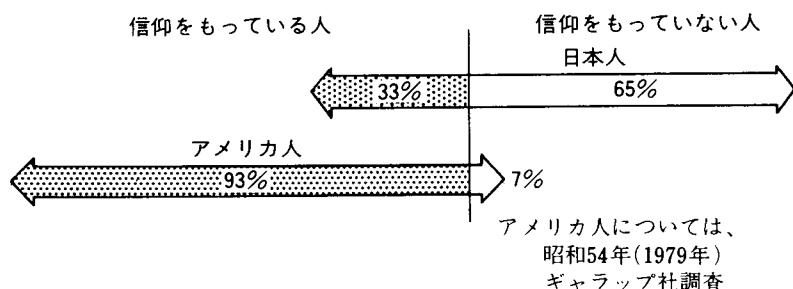
＜信仰の有無＞



信仰についての調査は、質問文のちがいによって、結果が大きく異なるので、厳密な意味での比較はできないが、参考までに、ギャラップの調査結果と比べてみよう(図I-2)。

図 I - 2

〈信仰の有無〉 一日米の比較—



◇信仰をもっている人

日本人……………三三%

アメリカ人……………九三%

◇信仰をもっていない人

日本人……………六五%

アメリカ人……………七%

ギャラップの質問文は、わたしたちのものとは少しちがうので、結果のちがいについては、多少、割引いて考える必要があるにしても、信仰の有無についての、日米両国民の差は、決定的に大きい。

もつとも、日本人の結果について、少し説明を加えておくと、わたしたちが用いた質問文は、信仰をもっている人の割合が少なく出てくるようなタイプに属する。具体的に言う、わたしたちの質問文は、

「あなたご自身は、何か宗教を信仰していますか」

というものである。この質問文からも明らかなように、わたしたちがたずねようとしたのは、調査相手本人の信仰であって、調査相手の家の宗教ではない。

この点に関連して、よく問題にされる数字に、文化庁宗教課の宗教統計がある。これによれば、日本の信者数は、なんと二億九二七万人。総人口の二倍に近い数になっている。このような結果を『エンサイクロペディア・ブリタニカ』は「奇妙な事実」(the curious fact)と呼び、また、平凡社の『世界大百科事典』は、「珍現象」と記している。どう名付けるかはともかく、こういった数字が出てきた理由の一つとして、この統計が、各種宗教団体のアンケート調査をもとにしていて、その各種宗教団体のいくつかは、世帯主の入信をもって全世帯員の入信と見なす傾向がある、という点があげられる。つまり、これは、各宗教団体の「公称の」信者数を足し上げたものであるが、それでも、これを、家の所属している宗教、というふうに考えれば、あながち、ムチャクチャな数字とは言えない。

これに対して、わたしたちの調査で「信仰がある」と答えた人びとは、個人として信仰をもっている、という人びとであり、言いかたを変えれば、信仰を自覚している人たちなのである。その割合は、家という単位で宗教に属している割合に比べて、かなり少なくとも不思議ではない。

それはたしかにそうなのだが、このような点を考慮に入れたとしても、やはり、日本人には信仰をもっている人が少ない、と言ってよいのではないだろうか。先に紹介したギャラップの調査結果は、質問文の字句は多少ちがっていても、基本的には個人の信仰についてたずねたものであって、文化庁の統計データとは、明らかに性格が異なっている。とすれば、少なくともアメリカと比較するかぎり、アメリカ人の圧倒的多数は信仰をもっているのに反して、われわれ日本人の大多数は信仰をもっていない、ということ、認めないわけにはゆかない。こ

と信仰に関するかぎり、日本人の多くは無宗教だ、と言われてもしかたがないのであろう。

(二)生活の中の宗教行動

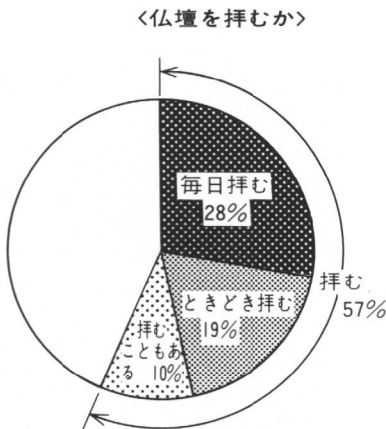
しかし、信仰という問題をしばらくおいてみると、必ずしも、日本人が無宗教だ、とは言えないことに気が付く。なぜなら、信仰をもたない日本人の多くが、日常生活の中で、さまざまな宗教的な行動をしているからである。

第一——現在、家に〈神棚〉があつて、それを拝むことがある、という人は、五三%。国民の半数を超えている(図I-3)。同様に、現在、家に〈仏壇〉があつて、それを拝むことがある、という人は、五七%である(図I-4)。神棚、仏壇、いずれの場合にも、それを拝むことがある、という人の割合は、信仰をもっている人の割合(三三%)よりも、かなり多い。信仰はないにしても、神棚や仏壇を拝むことのある人——それを、“無宗教”の人、と言つてよいのか、という問題は残る。

第二——〈初詣で〉^{はつしやう}を「よくする」または「することがある」という人は、八一%である(図I-5)。工業製品の品質管理なら、八割というのは、ずいぶん悪い。“歩留まり”かも知れないが、世論調査の結果として見れば、同じ八割でも、それは、“圧倒的多数”と見てよい。ということは、日本人なら、ほとんど誰でもが、新年になると、初詣でをしている、ということである。初詣でが日本人の“全国民的な行事”であることは、テレビの「ゆく年くる年」などの中継を見れば、認めないわけにはゆかないだろう。

第三——〈お守りやおふだをもらう〉ということについても、することがある人は、七七%に達している(図I

図I-4



図I-3

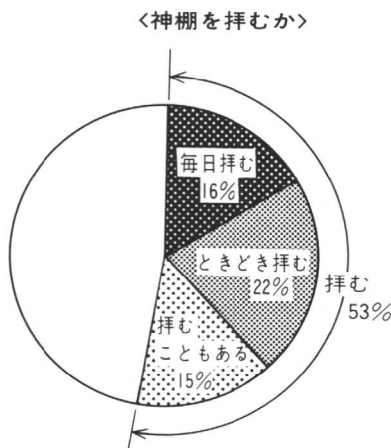


図 I - 6

〈お守りやおふだをもらう〉

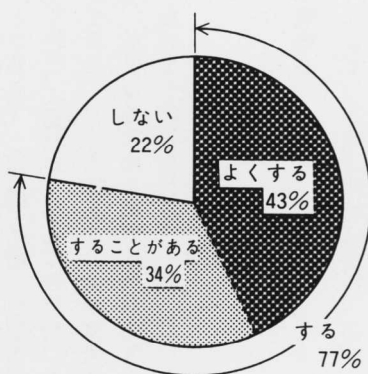
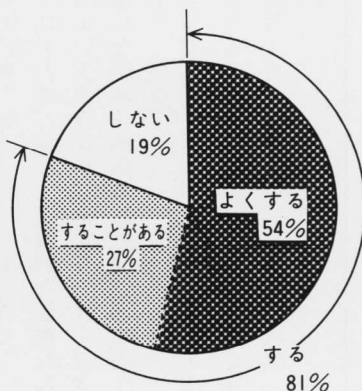


図 I - 5

〈初詣で〉



注

数字は、小数点以下を四捨五入しているため、総計が100%にならない場合がある。

「6」。恐らく、初詣でなどの機会に神社やお寺でもらってくる、というケースが多いのであろうが、これも、国民の八割に近い。お守りやおふだをもらったり、身のまわりに置いたりすることが、本当に宗教的なことなのか、という声もあるし、現世利便的ではないか、という批判もある。しかし、それをどう評価するかは別として、やはり、これも一種の宗教的な行動、と考えてよいのではないか。

第四——もう一つだけ、多くの日本人が行っている宗教的な行動の例をあげておく。それは、へ墓参りである。お盆やお彼岸の墓参りは、「よくする」という人だけでも六九%。「することがある」という人とあわせると、じつに、八九%にのぼっている(図 I - 7)。これは、「よくする」という人の多さから言っても、また、「することがある」という人を含めた広がり大きさから見ても、文句なしに、第一級の「国民的な」行動である。お守りやおふだをもらう、という行動が、宗教的であるかどうかを疑う人はいても、墓参り、という行動が宗教的な行動であることを疑う人はいないであろう。だとすれば、第一級の「国民的な」行動である墓参りは、とりもなおさず、第一級の「国民的な」宗教行動と言える。

以上、とりあえず、〈神棚・仏壇〉〈初詣で〉〈お守り・おふだ〉それに、〈墓参り〉を見てきたが、これらの結果から判断すると、日本人は必ずしも無宗教ではない。少なくとも、信仰以外の面を考慮に入れるなら、そう言って間違いないように思われる。

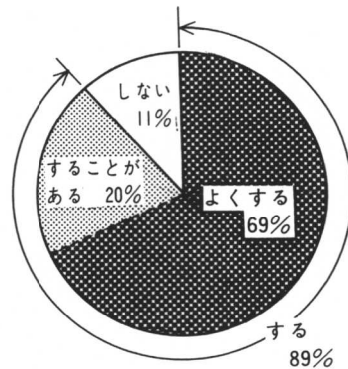
(三) 独特の宗教心

日本人は必ずしも無宗教ではない、という表現を用いたけれども、それだけでは、誤解を招くかも知れない。必ずしも無宗教でない、という控え目な言い方よりも、むしろ、日本人は、かなり宗教的な国民なのだ、と言ったほうがよいであろうか。と言うのは、日本人に、ある種の、素朴な宗教心があることを認める人が、少なからずいるからである。

前にもちょっと紹介した『エンサイクロペディア・ブリタニカ』は、『日本人の宗教』(Japanese Religion)という項目の中で、「日本は、いろいろな宗教の生きた博物館である」と言い、「日本には、ほかではもうすたれてしまったアニミズムやシャーマニズムが残存し、土着の神

図 I - 7

〈お盆やお彼岸の墓参り〉



道や、中国伝来の儒教や道教、キリスト教、それに、これらの融合した新興の諸宗教などが、多数、存在している」と記している。

もっと具体的に言うなら、日本人は、コンクリートのビルにコンピューターやボイラーをすえた時にも、神主を呼んでおはらいをする国民なのである。

「いつだったか、アメリカ人のコンピューターの技術者が、『日本人というのはどうもわからない』と笑っていたのを思い出す。彼は、日本の企業にコンピューターを